

武者小路實篤選集

第六卷

武者小路実篤選集 第六卷

青銅社版

武者小路実篤選集

第 6 卷

昭和40年1月30日 初版発行

限定本

定価 六八〇円

著 者 武者 小路 実 篤

発行者 真 鍋 謙 二

本文印刷 三恭印刷株式会社

口絵印刷 京橋原色版印刷所

製 本 石 津 製 本 所

東京都新宿区納戸町五番地

発行所 図書出版 株式 青 銅 社

電話 二六〇局 八七六五番

振替 東京 三四、八九二番

printed in Japan ©

序

「真理先生」は僕の山物語をかき出した結果として生まれたものだ。また雑誌「心」があって、僕に勝手なものをかかしてくれた結果として生まれたもので、「心」という舞台がなければこの作品は生まれなかった訳である。その代わり何か他のものをかいていたかも知れない。

「真理先生」は二カ年かかってかいたものだが、雑誌の〆切日に主にかいたもので二十二冊に分載されたので、大概一日か二日でかいたので、正味からいえば三十日あまりでかいたものだ。かかない時も時々、今度はどう書くかと頭の中では書いて消したりしたが、いよいよペンをとってかいたのは〆切日か、その前日からだった。若い時は何かいい考えが浮かぶと夜中でも飛び起きてかいたものだが、この頃は頭の内にかいたり消したりすることが平気になった。しかしその間に大体次の月にかく部分のはっきりして来、ペンをとっても予定通りに、少しは出来不出来もあるが、仕事は進んだ訳だ。始めは筋も何もないものだったが、三分の二

ぐらいかいてだんだん筋がはっきりして来たことは、いつもと同じである。

この小説の主人公は真理先生より寧しろ馬鹿一である。しかし思想的には真理先生が主人公であると思えていいと思う。老人、それも特別な生活をしているものが主人公で、若い人達は副になっっている、その点が今までの僕の作と少しちがっていると思う。僕には一番かきいい方法をとったが心をこめてかいた所もあると思う。出てくる人物は殆ど僕の分身であるが、僕の一面が誇張されている所もあり、いくらか理想化されている所もある。

この作は他の人にはあまり面白くないかと思っていたが、わりに愛読して下さった人が多かったのは大いに感謝する次第である。(一九五一、二)

武者小路実篤

武者小路実篤選集・第六卷

目次

真理先生 7

白雲先生 247

それ程でもないよ 441

解題……………中川孝

題字・武者小路実篤

真理先生

これも山谷五兵衛の話。

僕は最近真理先生を知った。真理先生という人がいることは僕は友達から随分前から知らされていた。しかし僕は食わず嫌いで、逢いたいとは思わなかった。どうも虫が好かなかった。誇大妄想狂のようにも思われたし、偽善者のようにも思われたし、道学者の出来損いのようにも思われた。いつも真理真理と言って真理を知っているのは自分だけだという顔をしているように思われた。

ところがあってみると、極く真面目な男にはちがいないが、噂に聞いて想像したのとはまるで違って、真剣なところのある男だ。僕の事だから相手がどのくらい、学問があるかないかは知らないが、ともかく僕の逢った多くの優れた人間のうちでも、一番精神力の強い男だということは一目でわかった。これでは多くの人に尊敬されるのは当然と思った。身体は大きくない、体力は強いとは言えない。しかしへんに精神力を感じさせる顔だ。歳は六十を越しているだろう。僕は日本に人がいないとよく人から聞かされもし、自分でも言っているが、もしかしたら、真理先生は、大物ではないかと思う。もしかしたらである。僕にはまだはっきりしたことは言えないのだ。この真理先生は独身で、生活の方のことは全部弟子が世話している。男の弟子や女の弟子が入れ代わり世話をしている。午前は先生から呼ばれた人だけが逢いにゆく。その他の人には逢わないことに大体きめられている。

午後になると、いろいろの人が訪ねてゆく。そして先生にいろいろ質問をする。その質問に対して、傍で見ていても気持ちのいいようにびたりびたりと返事してゆく。先生自身は何もかかない。しかし先生の語った言葉は弟子達を書いてゐるらしいが、まだ一つも本にはなっていない。

その答えぶりを一つ紹介してみよう。

「人を殺すことはどんな時でもよくないのですか」

「あなたが殺されていい時がありますか。あなたが殺されていい条件があれば、それを聞かして下さい。あなたがどんな時でも殺されるのがいやなら、少なくともあなたは人殺しをしてはいけません」

「私を殺しに來た人はどうですか」

「その時にならないとわかりませんが、人を殺すものは自分が殺されてもいいということを証明している人間です。すから、その時なら殺してもいいでしょう。しかし恐らく、人殺しするものは、もっと簡単な動機で、無考に人を殺すのでしょう。つまり、反省する力がないのです。教育されていない野蛮人なのです。だから教えることが必要になるのです。他人を殺すものは自分を殺す権利も他人の手に与える者だ。自分が殺されたくないものは他人を殺してはならない。自分が殺されたい人だけが、他人を殺していい人だ。しかしそんな人は他人を殺すような面倒をするよりは、先ず自己が殺されるがいい」

そう言う時、彼の心から火花が出るように感じられ、傍で聞いていてびりつとする。

彼は決してむずかしいことは言わない。しかし僕には反対出来ないことを言う。

或る人が「先生の考えは実に平凡だ」と言った。すると真理先生は澄まして言った。

「ありがとう」

その一言も聞いた時、ぴりっと胸に来た。

「僕はあたりまいの事きり言いたくない。今の人はあたりまいのことを知らなすぎる。何でも一つひねくらないと承知しない。糸巻きから糸を出すように喋るのでは我慢が出来ない。わざと糸をこんがらかして、その糸をほどく競争をしているようなものだ。あたりまいでない事を尤もらしく言うと、訳がわからないで感心する。こういう人間が今は多すぎる。僕はそんな面倒なことをする興味は持っていない」

二

僕は或る時天皇についてどうお考えになりますかと聞いたら、

「愛している。おしたい申している。これは母の血だ。理窟ではない」と言った。また或る時こう言った。

「日本全体のため、先の先まで考えることの出来ない人が多すぎる。あとは野となれ山となれという人が多い。碁打ちで言うと、一手先か二手先きり分らないで、偉そうな顔をしてものを言う無責任者には時々腹が立つよ。日本人はもっと頭の根気をよくしなければならぬ。一を知って二を知らない人間が、尤もらしい顔して大いに喋る。それが民主的だと思っている人が多い。もっと自分の言行には徹底した責任が持てるよう、よく考えぬく習慣が必要だ」

或る時、僕はこう言った。

「あなたは真理を愛するとおっしゃっているようですが、真理ってそんなにたよになるものですか」
「真理以外にたよになるものがありますか」

僕はそうとなりつけられた。

「真理以外にたよりになるものはない。人間は皆死ぬものだ。暴力は誰でも殺し得るものだ。だが真理は殺されない。最後の勝利は真理が得る。キリストは神の子だから僕は尊敬するのではない。またキリストが十字架を荷なったから尊敬するのではない。真理以外の事を言わなかったから尊敬するのだ。真理だけが死なない。また僕は心から頭をさげるのは真理だけだ」

「愛とか美とかはどうなのです」

「愛と美も真理に背かない時、限りなく美しい。真理にそむけば、その愛と美を僕は讚美出来ない。しかし愛と美に真理以上のものがあることを僕は認める。それ以上、愛と美を真心をもって愛することが、真理だと言える。真理は、人類全体が天国に入れる道を示すものにほかならないのです」

僕には真理先生の言うことがどこまで本当か知らないが、反対する気がせず、聞いていると、何となく明るい気になるのだ。

僕は或る時真理先生に、馬鹿一の話をした。すると真理先生は、大いに興味を持ってぜひ見に行きたいと言うのだ。

それで僕は、大いに興味をもって真理先生を馬鹿一の所につれていった。

三

馬鹿一に真理先生が君の画を見たいというので、つれて来たと言ったら大喜びで画を出して見せた。真理先生も初めはあまりに幼稚な画で驚いたらしいが、熱心に見た。長い沈黙のあとで、

「感心しました」

と言った。馬鹿一はそれまで黙って神妙にしていたが、そう言われると飛びあがるようによろこんで言った。

「本当ですか」

「本当です。僕には画のことはわかりませんが、僕は今までこんなに誠実無比な画を見たことはありません。実によく見てかいてある。しかも実に愛してかいてある。それ以上実に尊敬してかいてある。誰もこういう雑草や石をこんなに愛することは出来ないでしょう」

すると馬鹿一は

「ありがとう。ありがとう」と言って泣き出した。

そして今までかいた何百枚という、石や雑草をかいた画を持ち出して来た。

これにはさすがの真理先生も閉口したことと思った。

「よくもかいたものですね」

真理先生は微笑をうかべてそれを丁寧に見出したが、三四十枚見たらさすがに参ったらしく、

「もう見るのがくたびれました。今度またゆっくり見せて戴きましよう。人が来て待っていますから、今日はこれで失礼します。だが実に感心しました。今の日本にあなたのような人がいると思うと、嬉しくなります」

真理先生はそう言った。帰りに真理先生は言った。

「驚いたね。聞きしに優るという言葉が自ずと浮かんて来る。日本も小さい国だが、知れば知るほど面白い人がいるね」

「先生は本当に馬鹿一の面に感心なさったのですか」

「感心しました。僕は画のことはわかりませんが、あの本気さと、石や草を神のつくったもののように尊敬してかいているのに感心しました。あの画なら僕の室にもかけておきたいと思いました。それにあの真剣さと、勉強はどうです。それに実に正直によく見えています。感心しない訳にはゆきません。たしかに少し変なところがあります。僕は喜んであの男には頭を下げますよ」

「一つ画をもらって上げましょうか」

さすがの真理先生もすぐれとは言わなかった。

「くれと言ったら、どしどしくれそうですね。一つか二つなら喜んでもらいますが、それ以上は僕はほしくないのです。僕はあの世界に自分が入り込もうと思いませんからね。それに粗末にしてはわるいから」

「本当にうっかりほめたら、後が大変です。どんどんくれますよ」

二人は笑った。

「だが日本にもなかなかいい人がいることを、おかげで知って、嬉しく思いましたよ」

四

僕は真理先生が好きになった。それで午後によく出かけた。行けば何か教わることがあるように思った。また彼の所に入ります人間は、実に善良な人ばかりで、誰にも好意が持てた。勿論この世ではあまり成功しそうな人が多かった。

或る日真理先生に或る人が聞いた。

「朝に道を聞いて夕べに死すとも可なりという言葉がありますが、先生はいつ死んでもいいとお思いですか」